

桂離宮

Katsura Imperial Villa



■桂離宮の歴史

桂離宮は、後陽成天皇の弟・八条宮初代智仁親王により、宮家の別荘として創建されたものである。幼少の頃より文武百般に秀でておられた親王は、17世紀初頭にこの地を得られて後、元和元年（西暦1615年）頃に山荘の造営を起こされ、数年ほどの間に簡素のなかにも格調を保った桂山荘を完成されている。親王の40歳台前半の時期にあたり、古書院が建てられたものとみられる。親王が没せられて後10年余の間は山荘も荒廃期であったが、二代智忠親王は加賀藩主前田利常の息女富姫と結婚されて財政的な裏付けもでき、山荘の復興、増築などに意欲的に取り組まれた。智忠親王は父君智仁親王譲りの研ぎすまされた美的感覚をもって、寛文2年（1662年）頃までに在来の建物や庭園に巧みに調和させた中書院、さらに新御殿、月波楼、松琴亭、賞花亭、笑意軒等を新增築された。池や庭園にも手を加え、ほぼ今日に見るような山荘の姿に整えられた。特に桂棚及び付書院で知られる新御殿や御幸道などは、後水尾上皇を桂山荘にお迎えするに当たって新改造されたものと伝えられている。八条宮家はその後、常磐井宮、京極宮、桂宮と改称されて明治に至り、明治14年（1881年）十二代淑子内親王が亡くなれるとともに絶えた。宮家の別荘として維持され

このパンフレットは、**宝くじ**の社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。



てきた桂山荘は、明治16年（1883年）宮内省所管となり、桂離宮と称されることとなるが、創建以来永きにわたり火災に遭うこともなく、ほとんど完全に創建当時の姿を今日に伝えている。昭和39年（1964年）に農地7千㎡を買い上げ景観保持の備えにも万全を期している。

■概説

桂離宮の総面積は付属地も含め約6万9千㎡余りである。中央には複雑に入り組む汀線をもつ池があり、大小五つの中島に土橋、板橋、石橋を渡し、書院や茶室に寄せて舟着きを構え、灯籠や手水鉢を要所に配した回遊式庭園と数寄屋風の純日本風建築物とで構成されている。苑路を進むと池は全く姿を消したり、眼前に洋々と広がったり、知らぬ間に高みにあったり、水辺にあったりしてその変化に驚かされる。また切石と自然石を巧みに利用し、それにより真、行、草にもたとえられる延段や、あるいは飛石の変化を楽しむことができ、入江や洲浜、築山、山里等もあり、それぞれが洗練された美意識で貫かれ、晴雨にかかわらず四季折々に映し出される自然の美には感嘆尽きることを知らない。作庭に当たり小堀遠州は直接関与していないとする説が有力であるが、庭園、建築ともに遠州好みの技法が随所に認められることから、桂離宮は遠州の影響を受けた工匠、造園師らの技と智仁親王及び智忠親王の趣味趣向が高い次元で一致して結実した成果であろう。

京都御所、京都大宮御所、仙洞御所、修学院離宮とともに皇室用財産（国有財産）として宮内庁が管理している。

■桂離宮 略図



このパンフレットは、**宝くじ**の社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです。



発行 公益財団法人 菊葉文化協会
写真・資料提供 宮内庁



おもてもん みゆきもん
表門と御幸門

離宮の北側にある表門は桂離宮の正門である。特別の場合以外は開けられることはなく、普段の出入りは向かって右手、穂垣に沿いながら少し南側に回り込んだ所にある黒御門が使用されている。表門は、檜丸太を門柱とし、磨き竹を縦に隙間なく打ち並べてある。その少し奥に茅葺切妻屋根を精という自然木の皮付丸太で支えた御幸門（写真）がある。この門は、後水尾上皇をお迎えするのに当たり智忠親王が造られたと伝えられるが、その後失われ、家仁親王の時に再建された。

そとこしかけ 外腰掛

御幸道の中ほどから左に折れ、離宮苑内に入ると、外腰掛がある。茅葺寄棟造りの深々とした感じの屋根を皮付丸太で支えるだけの吹き放しであり、雪隠（便所）が付いている。茶室松琴亭の待合い腰掛である。腰掛の前を自然石と切り石を巧みに配した延段が長く延び、両端を二重櫛形の手水鉢と丈の低い灯籠で引き締めている。対面は蘇鉄山であり、その蘇鉄は薩摩島津家から献上されたと伝えられている。



すはま 洲浜

黒く扁平な石が敷き詰められ池に突き出している。先端に灯籠を据えて岬の灯台に見立てて海を演出している。また、その先の中島と石橋のつながりは、天の橋立に見立てたものと言われている。



しょうきんてい 松琴亭

松琴亭は、桂離宮で最も格の高い茅葺入母屋造りの茶室である。一本の切石を渡した橋を渡ると松琴亭である。

橋を渡る手前から松琴亭屋根の妻に「松琴」の扁額が見える。後陽成天皇の宸筆で、銘は拾遺集卷八雑上の「琴の音に峯の松風通ふらし……」の句から採られている。にじり口の内側は三疊台目（茶室用の畳）の本格的な茶室で、遠州好みの八窓の囲いである。松琴亭外観は、東、北、西の三方から眺めるとそれぞれ



に異なる風情が楽しめる。北側土廂の竈（かまど）構えと一の間の床や襖の青と白の市松模様は大胆かつ柔軟な発想と創意によるもので、そのデザインは現代になおいきいきと相通ずる斬新さをもっている。

しょうかてい 賞花亭



中島の一つで小高い丘の斜面を飛石に導かれて登ると、途中で水螢の名を持つ石灯籠があり、登りきった所に峠の茶屋風の賞花亭がある。苑内で最も高い位置にある。松琴亭と同じようにほぼ北に向かい、消夏のための小亭であり、茅葺切妻屋根に皮付きの柱を用いている。南側の竹の連子窓を通してみる景色は深山幽邃の趣きを備えている。

しょうきんてい 松琴亭

松琴亭は、桂離宮で最も格の高い茅葺入母屋造りの茶室である。一本の切石を渡した橋を渡ると松琴亭である。

橋を渡る手前から松琴亭屋根の妻に「松琴」の扁額が見える。後陽成天皇の宸筆で、銘は拾遺集卷八雑上の「琴の音に峯の松風通ふらし……」の句から採られている。にじり口の内側は三畳台目（茶室用の畳）の本格的な茶室で、遠州好みの八窓の囲いである。松琴亭外観は、東、北、西の三方から眺めるとそれぞれに異なる風情が楽しめる。北側土廂の竈（かまど）構えと一間の床や襖の青と白の市松模様は大胆かつ柔軟な発想と創意によるもので、そのデザインは現代なおいきいきと相通ずる斬新さをもっている。

しょうかてい 賞花亭



中島の一つで小高い丘の斜面を飛石に導かれて登ると、途中で水螢の名を持つ石灯籠があり、登りきった所に峠の茶屋風の賞花亭がある。苑内で最も高い位置にある。松琴亭と同じようにほぼ北に向かい、消夏のための小亭であり、茅葺切妻屋根に皮付きの柱を用いている。南側の竹の連子窓を通してみる景色は深山幽邃の趣きを備えている。



おんりんどう 園林堂

賞花亭の山裾にあり、本瓦葺宝形造り屋根の持仏堂である。今は安置されているものはなく建物だけが残っている。離宮全体の雰囲気と異質ではあるが、またそれなりの景観でもある。扁額は後水尾上皇の宸筆である。

しょういけん 笑意軒

笑意軒は、切り石を直線的に畳んだ人工的な汀線に面した田舎屋風の茶室である。茅葺寄棟造りの屋根に柿葺の廂を付けた間口の長い建物である。縁側のある口の間の腰高障子の上に横並びに六つの丸い下地窓を設けているが、下地の組み合わせをそれぞれに違えてある。その上方に掛けられている「笑意軒」の扁額は曼殊院良恕法親王の筆である。内部は襖で区切られるが、天井は一つのつながりをもっており、室内を広く見せる配慮と考えられる。蹲踞（茶庭の手水鉢）は「浮月」の名がある。舟着場の照明用に火袋に蓋のような笠を載せた三光灯籠が置かれている。



書院全景（表紙）

桂離宮の中樞をなす書院群は、東から古書院、中書院、楽器の間、新御殿と、雁行形に連なって立ち並んでいる。古書院には、池に面して月見台が設けられ、中書院は、一の間、二の間、三の間からなり、楽器の間は楽器などを格納していたところである。新御殿は、智忠親王が後水尾上皇をお迎えするために増築された建物である。一の間、南に櫛型窓の付書院をそなえ、その脇に棚板、地袋、袋棚を巧みに組み合わせた桂棚（写真）と呼ばれる違い棚がある。この棚は、修学院離宮の霞棚、三宝院の醍醐棚とともに天下の三棚と称されている。



なお、昭和51年7月から平成3年3月にかけて各書院及び茶室の解体大修理が行われた。



つきみだい 月見台

月を觀賞するために、古書院二の間の正面、広縁から池に突き出すように竹簀子で作られている。月見はいうまでもないが、苑内の主要な景観が一望でき、納涼の設備としても申し分ない。

げっぱろう 月波楼

月波楼は古書院に近い池辺の高みに建つ茶亭で、正面中央を広い土間にして開放的である。月を見るのによい位置にあり、土間の右手の部屋は、池を眺めて見晴らしが良く、土間の奥の座敷から北を見ると池は隠れて見えない趣向である。化粧屋根裏の竹の垂木が舟の底のような形に組んである。



おこしよせ 御興寄

書院の玄関であり、前庭は杉苔で覆われている。中門から切り石を敷き詰めた延段が御興寄に向けて延びているが、今までの苑路には見られなかった切り石の堅さのある構成で更に石段を四段上がると一枚石の大きな沓脱がある。六人の沓を並べられることから「六つの沓脱」という。

